縮小社会は生きやすいコミュニティー社会

2016 年 8 月
尾崎雄三

昭和 24 年(1951 年)から 3 年ほど(4～6 歳の頃)、私の家は茨木市の中心部の端の小さな川(名も「小川」)の横にあり、そこから南側の川沿い一帯は田んぼであった。水道はあったが風呂は３軒共用で、近くの銭湯も利用していた。小川は、童謡に歌われる小川と同じで、フナもコイもおり、ホタルもいた。遊びの一つが釣りで、小さな竹ざおとミミズで釣ったフナは夕食の食卓に上がった記憶がある。

小学校 2 年生だった昭和 28 年から 3 年ほど、我が家は茨木市で一番大きな川である安威川の堤防の上にあった。水道はなく、堤防をおりた川原の井戸が水源で、毎日水汲みをした。かまどと風呂の燃料は薪で、父親と川を流れてくる流木を拾い上げて乾燥し、のこぎりで切って薪割をしてつくった。夏は川で泳ぐのが楽しみであった。

住んだどの家も狭く、夏は蚊帳を利用しないと寝られず、冬は寒く火鉢にかじりついていた。むろん給湯器などというものはなく、厳冬期でも洗顔は水であった。ネズミやゴキブリは常駐し、蛇やネズミ，ムカデが入ってきたことも少なくない。電気は電灯とラジオだけへの使用であった。

いつもおなかをすかせていたし、ろくなおやつもなかったが、それでも、柿ドロボウをしたり，自然の中で自由に遊べて結構面白い生活であった。

現在の家はといえば、冬は暖房されて給湯器から暖かいお湯がでるし、夏は冷房、冷蔵庫に冷えた飲み物があり密閉性の高い家ではネズミもゴキブリもムカデも入ってこない。子供のころと比べると格段に快適である。

少なくとも６０年前には買い物場所は近所の市場であり、個人経営の小さな魚屋、八百屋、豆腐屋，干物屋、油屋、肉屋などが集まっていて、衛生的で美しいというものではなかった。今、大手のスーパーマーケットに人の少ない朝に行くと、しばし呆然とする。品物は多く衛生的で明るく、大抵のものは売られていて、かつ広い。衣服もカラフルでツギのあてられたものを着ている人はいない。物質的には豊富で快適な時代になっている。2015 年の日本の GDP は，世界第 3 位であった。

しかし、今の日本で豊かさを実感している人は意外に少ない。

データで見てみよう。日本の子どもの貧困率は，2009 年のデータで OECD 加盟国中，韓国，スペインに次ぐ 29 位の 15.7％であり(内閣府ホームページ)，所得格差を示すジニ係数も 0.34 であり，OECD 加盟国中スペインより下位の 26 位で，OECD 加盟国平均(0.32)よりも高く（OECD ; 2012 年 2 月 14 日)，アメリカ(0.39)と同様，格差の大きな社会である。

厚生労働省の国民生活基礎調査(2014 年 7 月 2 日発表)の結果では，世帯の生活意識で「大変苦しい」が 29.7％，「やや苦しい」が 32.7％で合わせて 62.4％であり，1991 年以降増加

が続いている。また「普通」回答が 34.0%で，90%以上が「普通」と回答した 1970 年代からは大幅に減少している(上野康也，日経ビジネスオンライン 2015 年 7 月 28 日)。

子どもたちにとって，学校での勉強は偏差値だけの評価になり、塾へ行かなければならず、戸外で元気に走り回って遊ぶ子供を見かけることはほとんどない。会社では労働生産性向上が求められて昔とは比べものにならないほど厳しい労働環境であり、過労死，うつ病，自殺も多いし，貧困にあえぐ母子家庭、父子家庭、失業者は多く，介護離職も大きな問題になっている。

将来に目を向けてみよう。

世界の状況で最も注目すべきは，石油の産出量であろう。現在は石油文明の時代であり，食料生産すら石油に頼っているから，石油の枯渇はまさに生命線である。しかるに，国際エネルギー機関(IEA)も石油生産のピーク(オイルピーク)を過ぎたと認めているのであるから，石油消費を減らさなければ，一気に危険領域に突入する可能性がある(松久寛，中西香「衰退する現代社会の危機」(日刊工業新聞)；久保田宏，他「化石燃料の枯渇がもたらす経済成長の終焉」など)。

金属資源も枯渇が進んでいる(加藤尚武「資源クライシス」(丸善；2008 年))。少なくとも，高品位鉱石が減少し，精製により多くの石油を必要とする低品位の鉱石を利用しなければならなくなっている。

日本においては国の負債が 1000 兆円を超えている。アメリカの国債などの債権があるから，問題はないという説もあるが，負債は負債であり，利息を支払う必要があるし，いずれ返さなければならない。現在はマイナス金利であるから問題はないが，金利が 1%になれば毎年約 10 兆円の利息の支払いが必要であり，税収が約 55 兆円余であるから，2 割が利息に消えることになり，加えて医療費がおよそ 40 兆円であることを考え合わせると，およそまともな財政状況とは思われない。この負債は，そのまま後世代に残される。

農林業は，従業者が高齢化すると共に減少し，耕作放棄地と手入れの必要な山林放置が増加している。カロリーベースでの食糧自給率が 40%に満たない日本において，将来的に安心できる状況とはいい難い。現在は輸入によって国民は豊かな食生活を送れているが，気候変動などで世界的な食糧不足が発生したときに，自国民を犠牲にして日本に食糧を供給してくれる国などないであろう。

われわれは，祖先の努力の結果，今の物質的に豊かで快適な生活を送れている。では，後世に何を，どのような社会を残すべきであろうか。そしてそのために何をすべきであろうか。電気学会の倫理綱領 2.に注目すべきことが規定されている。「自然環境，他社及び他世代との調和を図る」とあり，他世代とは後世代である。自分たちの世代だけが利益を得て，負債を後世に残してはいけないことを現世代の倫理としているのである。残念ながら大手電力会社は，原発を推進し，何の利益も生まず，ただ管理費用が必要で漏えいすれば大変な危機を招く大量の放射性廃棄物を後世代に残そうとしている。国の負債 1000 兆円超と合わせると

とんでもない負の遺産を後世に残そうとしているのであるから，明らかな倫理違反である。これは，見方を変えると，いま生きている現世代さえ良ければ，後世の人々が苦しんでも構わないという極めてエゴイスティックな考え方であり，到底許されるものではないだろう。

われわれは，祖先のおかげで物質的に豊かで快適な生活を送れており，少なくとも物質的には豊かな状況であるといえるから，少なくとも，物質的にはある程度満足できる社会を後世代に残すことが責務である。ところが現在の文明を支えている石油などの鉱物資源は枯渇に向かいつつあり，これらの資源は再生しないものであるから，後世に対する責務を果たすには，その消費を削減し，できるだけ後世に残す努力をしなければならないということになる。すなわち，これから我々が目指すべき社会は，少なくとも資源，エネルギーの消費を縮小し，後世に残す社会，「縮小社会」である。ただし，現世代においても豊かさはできるだけ減らさないことも重要であり，それは可能であると考える。豊かな社会というのは，物が大量に供給され，消費する社会ではない。お金を多く持ち，高級品をたくさん買って持っているが，心は寂しく貧しい人がたくさんいることや逆に物質的，金銭的には恵まれていないが，心の豊かな人も多くいることはよく知られている。元ウルグアイ大統領ホセ・ムヒカ氏の「貧しい人」という言葉もこれを示している。

これから目指すべき社会である縮小社会において必要なものは，食料と水，エネルギー，そして医療，安全などの社会保障である。人間にとって必要なものは衣食住とされているが，現在から先にある社会においては，衣料と住居はすでにかなりいきわたった状況にあって，補修と消耗品の補充により賄えるだろう。しかし食料と水は常に新鮮なものの供給が必要であり，ある程度快適な生活を送るためには，エネルギーと医療，社会保障も欠かせない。そして，これらを提供するためには，科学技術，経済環境も欠かせないといえる。

縮小社会は，コミュニティーをベースとするものにならざるを得ないと考える。最大の理由はエネルギーである。現状のような大都市集中型社会では，電気，食料，石油などはすべて長距離輸送に頼らざるを得ないが，そのために送電ロスや輸送にエネルギーを消費する。エネルギー消費を低減する観点からは，地域内(コミュニティー内)での地産地消を中心とし，必要なもの，電気，熱，食料などをできるだけ短距離の輸送で供給する必要がある。一方で，最新設備を備えた病院，大学などは，いくつかのコミュニティーで共有する必要があるだろう。

コミュニティーにおいて，食料と水，エネルギー，そして医療，安全などの社会保障が満たされるとそれでいい，ということではない。重要なのは，「住みやすさ」であり，人間関係であり，「人間」がいかに「幸福感」をもって生きられるかということである。コミュニティーの典型は日本の旧来の「村」であり，村社会である。村社会は，「原子力ムラ」のように地域に関係ないものもあるが，食料，エネルギーなどの供給を考えると「地域」に結びつき，旧来の「村」に近いものとなる。ただし，昔の村社会のように閉鎖的なものは，「住

みやすさ」という点で問題がある。縮小社会のモデルとなるような生活をしている長谷川浩氏は，地域主権を提唱し，その際に必要な理念として，①風土への着目，②閉鎖的ではなく，外部に開かれた，信頼できる人のネットワーク，③自立性・自律性，④地域間の連携，を挙げる(長谷川浩「食べ物とエネルギーの自産自消」(コモンズ))。この②の「外部に開かれた」という点は，今後のコミュニティー社会において重要であると考える。

日本の旧来のコミュニティーである「村」社会は，残念ながらあまり評判がよくない。村の外から入ってきた人間を「よそ者」として扱うし，他の地域から嫁いで来た若い人の中には，「まるで監視されているようだ」と感じるという人もいる。近年，田舎暮らしにあこがれて農村に移住して失敗する人も多く，その理由はやはり田舎の生活環境になじめないからだといわれている。地域の人口減を防ぐため，都会からの移住を促進する自治体の中では，特に人格の優れた面倒見のいい人を移住者の世話係に任命するという方法を講じているところもあるという。これも裏を返せば，排他的な人が多いということを意味する。地方の農村部の集落では，道路，水路，ため池，神社などの共有財産を維持管理しなければならず，身勝手な人がいると周りが迷惑するという事情があるということはわかるが，都会からの移住者には息苦しさを感じさせるものであろう。広井良典氏も「真綿で圧迫されている感じ」と表現しているように(広井良典「定常型社会」(岩波新書))，日本社会全体がそのような傾向があり，特に農山村においてより強いようである。

ただ，「外部に開かれた」ということの中味は，農山村では難しい面があると思われる。それは「土地」である。農林業は，年単位の仕事であり，ノウハウも多く、素人に簡単に参入できる業種ではない。特に、田畑は隣接していても１枚ごとに性質が異なり，１か所でうまくいっても隣では失敗することもあるといわれており，それほど難しいそうである。そして，毎年手入れをしないといけないし，一旦荒れてしまうと，元に戻すには年単位の手入れが必要になる。農地と関連する水路，農道などに関しては，簡単に外部に開放するわけにはいかない。前述の新規移住者の世話係のような，移住者を受け入れようとする人々と真剣に農村になじもうとする移住者がいることは事実であるから，改善は十分に可能である。

このような地域の状況は，世界のどこでも似たようなものと思われるが，参考になる地域もある。BS 日テレで「小さな村の物語イタリア」という番組が毎週土曜日に放送されており，230 回を超えるが，ここで紹介される村は，いずれも小さなコミュニティーであり，紹介されている人は皆，家族を大切にし，贅沢はしないが貧しくもなく，心豊かに暮らしている。もちろん，離婚した，子供に早く死なれたなどという話も出てくる。

デンマークは原発を拒否し，風力発電を電力の中心にしたことで有名であるが，大学生が EU の問題，移民対策，テロ，外交などの話題を普通にしており，自らの意見を持っていないと仲間との会話に入っていけないそうである（山田昌弘「くらしの明日；議論して説得できる国か」毎日新聞 2016 年 8 月 10 日）。日本では，政治の話や個人の意見の主張は，普通にはできない雰囲気であるから，デンマークは開かれたコミュニティーであるといえるのかもしれない。山本七平氏の「空気の研究」に指摘されている日本人の特性はいまだに変わっていないし，そう簡単には変わらないだろう。しかし，これを変革して誰もが自分の意見を主張でき，ヴォルテールの「私はあなたの意見には反対だ、だがあなたがそれを主張する権

利は命をかけて守る」という言葉を，誰もが共有する社会でなければならない。コミュニティーのルールは守るが，自由に意見が言えることは，「住みやすさ」の重要な条件である。

コミュニティーは人間が構成するものであるから，人間とはどういう動物であるかを冷静に理解し，あるべき姿を考えておかなければならない。私は，以下の３つの川柳やことわざが人間の本質を表していると考えている。

① あなうれし，隣の蔵が売られゆく
② 泣きつつも，良いほうを取る形見分け
③ 隣のおはぎはあんこが多い

上記の①は，裕福だった隣家が没落し，財産が処分されていく様子を見て，おそらく表面的には「お気の毒にねえ」と言っている人の内心を見抜いた川柳である。似たようなものに，「人の不幸は蜜の味」というのがある。②は，現在では相続争いであろうか。親が死んで悲しみつつも，遺産は多く手に入れようという気持ちをずばり言い当てている。③は，隣のものに限らず，他人のものは，同じものでもよく見えるという人間の心理を突いたものである。

仏教，キリスト教のもとであるユダヤ教，儒教は，紀元前に生まれたものであるが，その教えるところは現在もそのまま生きている。これらはいずれも，文明が発生し，人間が大きな集団となって生活を始めて生まれたものである。大きな集団になると，当然人間のエゴが衝突するし，格差も発生し，それによって争い，戦争も起こり，無残な死を遂げる人間が多く生じる。そのような中で，人間の本質を考察し，あるべき姿を求めた結果生まれたものが仏教，ユダヤ教，儒教なのではないかと個人的に推測している。人間は 3000 年も昔から進歩なんかしていない。進歩したのは科学技術であり，それを人類の進歩と考えるのは単なる錯誤であると思う。

縮小社会において，人間の生き方としてエゴがまかり通るようでは，生きにくい社会になってしまうが，「真綿で締め付けられるような」と感じさせる社会であっても困る。言い古されたことではあるが，自由と責任，すなわち自らの自由を主張する限り，他人の自由も尊重する義務を負うということの認識を新たにする必要がある。今の日本をどのようにして改革すればいいのだろうか。時間がかかるが、確実な方法は教育であろう。子供のころから民主主義の考え方，生き方を教えなければ，旧日本的考え方を払拭することは難しいと思われる。

人間関係とともに重要なのが社会を維持するための経済である。現在は資本主義の世の中であり，とりわけ金融資本主義，市場原理主義の世の中である。資本主義は，一言でいえば資本に対して利潤を得ることが原理であり，企業は利益を挙げることが求められる。江戸時代においては，利益を挙げるということに関しても近江商人の「三方よし」のような倫理があったが，今や儲かれば何をしてもよいという時代になっている。食うか(買収するか)食われるか(買収されるか)のような時代であり，企業は買収されないために営業利益を挙げて内

部留保に励み，営業利益をあげるために人件費を削減する。そして人件費削減のために人員削減，非正規雇用化を進め，サービス残業を強制したりする。

論語に「小人は、利に喩（さと）る」という言葉があり、愚かな者、心の卑しい者は自分の利益のみを考えると教えている。かつては、小人などと言われることのないように自らを律したものである。今はどうであろうか。目を覆うような惨状であり、談合、贈収賄、手抜き工事、データの改ざん、不正会計、政治資金の不正利用、斡旋利得収賄やそれらからの責任回避などマスコミに載らない日がないと言えるほどである。倫理的に問題ある手段で高額の利益を得たエリート官僚出身者が，「お金を儲けることは悪いことですか？」などと公然という時代でもある。

資本主義は、ニクソンショックを境に金融資本主義(マネー資本主義)の時代になり、現在では、世界の GDP が約 70 兆ドルであるのに対して、動くお金は年間約 300 兆ドルといわれている。すなわち、投機マネーが圧倒的に多く、カネがカネを生み，カネを持たないものは貧しくなり，さらに格差が拡大すると言ってもよい状況である。

本来，人間は額に汗して何らかの生産的な仕事をし，その報酬で生活をしていた。コミュニティーにおいては，人はそれなりの仕事をしなければならない。人間はなぜ仕事をするのか。私が中堅の化学工業の製造現場で原料が入った 200kg を超えるドラム缶を運び汗を流して働きながら考えたのは，以下の 3 条件である。

① 仕事が面白いから。
② 仕事の成果により，それを行った自分の存在が認識，評価してもらえるから。
③ 報酬が得られるから。

これらの 3 条件がすべて満たされればいうことはないが, 現実にはそのケースは殆どないといえそうである。ほとんどの場合，人が働くのは理由③のためであり，生きていくために最低限必要な報酬を得る目的の場合が多い。子供がお手伝いをするのは，ほめてもらえることがうれしいから，②に当たるのだろう。「仕事」は興味をもって集中でき，成果によって自分の存在が周囲に評価され，自らが仕事をする中で人間として成長し，報酬を得るものであり，縮小社会においても必要なものである。

人は，かつては自然の脅威に対して肩を寄せ合い，助け合って生きてきた。今は科学技術の進歩と経済成長によって，自然の脅威は緩和され，人々の生活に必要な物質的基盤はほぼ満たされ，食料などの日常の消耗品以外，これ以上大量のモノは必要がない状況になっている。日本政府は，失われた 20 年の回復という名のもとに行っている財政投資やマイナス金利政策までもがほとんど効果を奏さず，モノが売れないことがこれを示している。今後は，これまでのインフラの補修・補充を行っていけばよい時代である。

経済成長は必然的に資源・エネルギーの消費を増大するものであり、地下資源が枯渇しつつある地球においては受け入れられるものではない。特に石油が枯渇した時のエネルギーを

どうするか，食糧不足が世界的に起こった時に国内の食料調達をどうするか，および上記の問題をどう解決するかを，経済的に余力のある今ビジョンを立てて進めるべきであろう。まず資源，エネルギーを大量に消費する経済成長を放棄し，省資源，省エネを進め，食料の大量廃棄をなくさなければならない。家の中を見れば，不要なものがたくさん転がっている。モノとカネに執着した強欲を捨て，「足るを知る」気持ちを持てば，生きやすい縮小社会になると考える。1950～60 年代の生活は，物質的に豊かではなかったが，いいところも多かった。石油枯渇による激動の時代は必ず到来する。その時にあわてても間に合わないだろうから，今から縮小社会の芽をしっかり育てておくことが必要である。